

話し言葉における「じゃん」について ―首都圏に暮らす 10 代の使用実態―

松田 齊紀
(東アジア課程 中国語専攻)

キーワード: 話し言葉、じゃん、若年層、確認要求、推量

0. はじめに

本稿は、首都圏で用いられている話し言葉「じゃん」が、10 代の若年層によってどのように使用されているかを明らかにすることを目的とする。なお、本稿では共通語としての「じゃん」を扱うため、方言における「じゃん」は考察の対象としない。例文番号、例文の下線は筆者による。

1. 先行研究

卒業論文では、先行研究として井上(1983, 1998)、早野(1996)、田野村(1988)、蓮沼(1995)を挙げたが、本稿では紙幅の都合上、早野(1996)、蓮沼(1995)の一部を挙げる。

1.1. 早野(1996)

早野(1996)では、主として「じゃん」の用法について考察が行われている。その中で、「じゃん」と「んじゃん」の違いについて以下のように記述している。

～ジャンは上昇イントネーションを伴う場合、基本的には聞き手に念を押す表現であり、聞き手に確認をする表現である。未知のことを推量する場合、～ジャンは使用できない。また、下降イントネーションを伴う場合は、相手に自分の意見を強要する意味か、強い確認の意味になる。

～ジャンに対して、～ンジャンは基本的に婉曲的な推量表現である。ただし、～ンジャンがこのような推量の意味で用いられる場合は上昇イントネーションを伴う。下降イントネーションを伴っている～ンジャンは、意外な事実に対する驚きを表す。
(早野 1996: 91-92 を要約)

早野(1996)では、イントネーションが上昇調か下降調かによる区別はしているものの、発話される場面や状況がわかるような例は出されていない。このような点から、「じゃん」の用法が十分に分類されているとは言えない。

1.2. 蓮沼(1995)

蓮沼(1995)は、「だろう」「じゃないか」「よね」といった聞き手の同意、共感や認知状態を確認する一連の文末表現「確認要求表現」について考察している。これらのうち、「じゃないか」が確認的に用いられる場合について「共通認識の喚起」「認識形成の要請」「認識生成のアピール」の三つの用法を挙げている。以下に「じゃないか」の三つの用法につい

蓮沼(1995)の記述を要約する。なお、例文は引用である。

・共通認識の喚起 — 認識的に優位な位置にいる話し手が、自分と同様な認識をもつように聞き手を促し、その成立状態を確認するという働きがある。この用法は、聞き手が忘れていたり、まだ気づいていないことについて、話し手が認識を喚起し、その成立状態を確認するという特徴をもっている。

(a) 同級生に加藤さんっていたじゃないか。背の高い男の子。 [蓮沼 1995: 393 (8)]

・認識形成の要請 — 通常の認識能力をもっていれば、認識できて当然といった見込みに基づいて、聞き手に認識の形成を要請する用法である。

(b) だから言ったじゃないの。あの人には気をつけなさいって。 [同上: 394 (11)]

・認識生成のアピール — 話し手自身が知識を獲得したことを詠嘆的に表明するといった用法で、今まで気づいていなかったことを発見した際の驚きや、話し手の個人的な評価や意見を聞き手にアピールするような場合に用いられる。

(c) 何はともあれ、合格できたんだからめでたいじゃないか。 [同上: 396 (22)]

(蓮沼 1995: 393-396 を要約、例文は引用)

蓮沼(1995)における「じゃないか」の分類には修正が必要なものもある。例として(c)が挙げられる。(c)は、前に「すべり止めなんだし、合格しても嬉しくないよ」という発話があったとすれば、「認識形成の要請」に分類されるが、蓮沼が挙げた例文だけでは「認識生成のアピール」と「認識形成の要請」どちらに分類されるか判断はできない。

1.3. 先行研究のまとめ

早野(1996)は、「じゃん」には「確認」という用法があり、「じゃん」が「んじゃん」という形式をとると「推量」の用法を持つとしている。また「じゃん」の元になった「じゃないか」には、蓮沼(1995)において「共通認識の喚起」「認識形成の要請」「認識生成のアピール」という三つの用法があるという指摘がなされていることを確認した。

以上を踏まえると、「じゃん」は「共通認識の喚起」「認識形成の要請」「認識生成のアピール」「推量」の四つの用法に分類できると仮定できる。しかし、先行研究でなされている分類には修正が必要であり、実際に使用されている「じゃん」について調査をするには、より丁寧な分類を考える必要がある(2.1 節で後述)。

2. 漫画における「じゃん」の使用実態

2.1. 調査方法

首都圏を舞台にしており、10 代の登場人物が描かれている作品を調査することで、首都

圏に暮らす 10 代の若年層が使用している「じゃん」の実態を推測できると考えた。まず、学校を舞台にしている中学生・高校生が登場するものであれば「じゃん」が頻繁に使用されているであろうと予測し、首都圏の中学校・高校が舞台になっている五種類の漫画を選択した。いずれの作品も、1 巻から 3 巻までを調査対象とした。

次に、それらの作品の中で登場人物が発話している「じゃん」を記録し、それが発言されている状況、そして前後の会話から、どのような用法で使われているのか分類した。この際、先行研究でなされている分類には従わず、独自の基準で分類した。それは、「じゃん」を扱っている先行研究が少なく、蓮沼(1995)には先の例文(c)に見られるような問題があったためである。早野(1996)と蓮沼(1995)の分類を整理した結果、今回用いた分類の基準は以下の通りになった。

- ・ 共通認識の喚起 — 話し手の発言の内容について、聞き手が知らなくても仕方ない、もしくは、聞き手と認識が一致しているのかわからない場合。
- ・ 認識形成の要請 — 話し手の発言の内容について、聞き手と認識が異なっているとわかる場合。
- ・ 認識生成のアピール — 話し手が、新しい知識・情報を獲得したことを詠嘆的に表明している場合。また、独り言や、心の中でその発見に対する個人的な意見を述べている場合。
- ・ 推量 — 「んじゃん」の形で使用されており、推量の意味で用いられている場合。
- ・ その他 — 漫画では使用されている「じゃん」のイントネーションがわからないため、どの用法に分類するか判断できなかったもの。

2.2. 調査結果

以下の表は、今回の調査で収集した「じゃん」の各用例が、どのような用法で使用されていたかを分析し、作品ごとにまとめたものである。

表 1: 漫画における「じゃん」の使用実態

	共通認識の喚起	認識形成の要請	認識生成のアピール	推量 (んじゃん)	その他	合計
ROOKIES	3 (8.8%)	23 (67.6%)	7 (20.6%)	0 (0.0%)	1 (2.9%)	34 (100.0%)
ダイヤの A	0 (0.0%)	2 (15.4%)	11 (84.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	13 (100.0%)
いちご 100%	8 (11.1%)	35 (48.6%)	28 (38.9%)	0 (0.0%)	1 (1.4%)	72 (100.0%)
ドロップ	0 (0.0%)	12 (60.0%)	7 (35.0%)	1 (5.0%)	0 (0.0%)	20 (100.0%)
涼風	2 (3.7%)	17 (31.5%)	35 (64.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	54 (100.0%)
合計	13 (6.7%)	89 (46.1%)	88 (45.6%)	1 (0.5%)	2 (1.0%)	193 (100.0%)

2.3. 漫画調査のまとめ

今回の漫画調査では、調査できた作品が五種類にとどまってしまった。しかし、「認識形成の要請」と「認識生成のアピール」の「じゃん」が非常に高い割合で用いられており、一方「共通認識の喚起」の「じゃん」が用いられている割合が低いことがわかった。「共通認識の喚起」の「じゃん」が使用できる場合であっても、「だろ」「もん」「よね」「でしょ」などが用いられていることが確認できた。「だろ」の元の形である「だろう」、そして「よね」は蓮沼(1995)で「じゃないか」と共に「確認要求表現」として扱われている表現であり、「共通認識の喚起」の用法をもつ。なお、「だろ」は主として男性によって、「でしょ」は女性によって発言され、話し手が聞き手を諭すような会話で使われていた。「もん」と「よね」は男性と女性の双方が発言し、「共通認識の喚起」の「じゃん」がもつ用法に加えて、話し手が聞き手に向けて発言するのと同時に自分自身に対しても言い聞かせているような場面で使用される割合が高かった。また、「んじゃん」の形式で表される「推量」に関してはほとんど用例が得られず、「んじゃない」や「んじゃね」など、他の表現が使用されていることが確認できた。

3. 首都圏の 10 代における「じゃん」の使用実態

3.1. アンケート調査

3.1.1. 調査方法

アンケート調査は、首都圏で暮らしている 10 代の若年層が日常生活において「じゃん」をどのように使用しているのかを明らかにすることを目的とし、神奈川県内の中高一貫校である、私立森村学園中等部・高等部で実施した。この学校を調査の対象に選んだ理由として、東京都と神奈川県の広い範囲から生徒が通っていて、なおかつ中学生と高校生の両方を対象にした調査ができるため、首都圏の 10 代における「じゃん」の使用実態に極めて近い結果が得られると考えたことが挙げられる。それぞれのアンケート調査は 2010 年 11 月 6 日から 12 日の期間に実施した。インフォーマントについては以下の通りである。

・アンケート調査 1 — 12 歳から 17 歳の男性 225 名と女性 267 名、計 492 名。現住所は男性 56 名と女性 61 名が東京都、男性 168 名と女性 206 名が神奈川県、男性 1 名が千葉県。

・アンケート調査 2 — 12 歳から 17 歳の男性 172 名と女性 205 名、計 377 名。現住所は男性 56 名と女性 57 名が東京都、男性 116 名と女性 148 名が神奈川県。全員がアンケート調査 1 と異なるインフォーマントである。

なお、出身地が首都圏ではないインフォーマントもいたが、全員が現住所に 2 年以上住んでいると答えたため、今回の調査対象として問題はないと判断した。

アンケート調査 1 では、インフォーマントに「じゃん」を使用している会話文を提示し、その表現について「自分は使う」「自分は使わないが聞いたことがある」「使わないし聞かない」の三つの選択肢から選んで回答してもらった。問題は合計で 12 問あり、会話文はす

べて筆者が作成したものである。アンケート調査2では、アンケート調査1で使用した会話文の「じゃん」を括弧にしたものをインフォーマントに提示し、括弧になっている部分に入る表現を日常生活で使っている話し方で回答してもらった。以下、アンケートに使用した会話文を示す。

(1) [同級生について友人と話している場面]

A : 隣のクラスに田中っているじゃん。

あの子、めっちゃ可愛いよね。

B : 確かにきれいだよ。この前、原宿でスカウトに声かけられたらしいよ。

(2) [友人から試験直前の週末に遊びに行こうと誘われて]

A : 今週末は無理だよ、月曜から試験じゃん。

B : あ、そうだった！すっかり忘れてたよ、さすがに少しは勉強しなきゃダメかな。

(3) [練習試合について友人と話している場面]

A : 絶対やばいよ。去年やったとき

ボコボコにされたじゃん。

B : そうだったね、第一高校めっちゃ強かったもん。

(4) [修学旅行の自由行動で]

A : そろそろ戻ろうよ、

集合まであんまり時間ないし。

B : そんなにあわてなくていいじゃん。もうちょっと回ってこうよ。

(5) [約束の時間に遅れて]

A : もう、30分も遅刻するなんてありえないよ！

B : 仕方ないじゃん！電車が遅れてたんだよ！

(6) [好きな人になかなか告白できない友人との会話]

A : もし、振られちゃったらどうしよう？
気まづくなっちゃうのはイヤだよ。

B : やってみなきゃわからないよ！
思い切って告ってみればいいじゃん。

(7) [昼休みに、友人と弁当を食べている場面]

A : おっ、卵焼き残ってるじゃん。
もらっちゃうぞ！

B : やめてよ、最後に食べようと
思ってるんだから！

(8) [遅刻の多い友人が、早く学校に来たので]

A : おはよう、今日はずいぶん早いじゃん。
どうかしたの？

B : 夜遅くにホラー映画みたらさあ、
怖すぎて眠れなかったよ。

(9) [友人の志望校を初めて聞いて]

A : 第一志望は、早稲田の法学部だよ。

B : えっ？めっちゃレベル高いじゃん！

(10) [朝、教室で友人と話している場面]

A : 前田くん、まだ来てないね。

B : まあ、あいつのことだから、遅刻して来るんじゃん？

(11) [下校中に友人と]

A : 今日めっちゃ寒いよね。

マフラーしてくればよかったなあ。

B : 確かに寒い！ひょっとしたら今夜、
雪でも降るんじゃん？

(12) [友人の模擬試験の結果を見て]

A : すごい！前より点数上がってるし、
これなら志望校受かるんじゃん？

B : うん、なんだか自信持てそうだよ。

なお、アンケートの会話文で使用されている「じゃん」は、(1)から(3)が「共通認識の喚起」の用法、(4)から(6)が「認識形成の要請」の用法、(7)から(9)が「認識生成のアピール」の用法、(10)から(12)の「んじゃん」が「推量」の用法である。

3.1.2. 調査結果

以下の表は、それぞれのアンケート調査について、男性インフォーマントと女性インフォーマントの回答結果をまとめたものである。

表 2: アンケート調査 1 の結果

	使う	使わないが聞いたことがある	使わないし聞かない	合計
(1) 男	183 (81.3%)	37 (16.4%)	5 (2.2%)	225 (100.0%)
女	239 (89.5%)	27 (10.1%)	1 (0.4%)	267 (100.0%)
(2) 男	174 (77.3%)	44 (19.6%)	7 (3.1%)	225 (100.0%)
女	235 (88.0%)	30 (11.2%)	2 (0.7%)	267 (100.0%)
(3) 男	158 (70.2%)	51 (22.7%)	16 (7.1%)	225 (100.0%)
女	215 (80.5%)	45 (16.9%)	7 (2.6%)	267 (100.0%)
(4) 男	151 (67.1%)	60 (26.7%)	14 (6.2%)	225 (100.0%)
女	191 (71.5%)	68 (25.5%)	8 (3.0%)	267 (100.0%)
(5) 男	151 (67.1%)	66 (29.3%)	8 (3.6%)	225 (100.0%)
女	205 (76.8%)	52 (19.5%)	10 (3.7%)	267 (100.0%)
(6) 男	134 (59.6%)	60 (26.7%)	31 (13.8%)	225 (100.0%)
女	185 (69.3%)	67 (25.1%)	15 (5.6%)	267 (100.0%)
(7) 男	157 (69.8%)	41 (18.2%)	27 (12.0%)	225 (100.0%)
女	193 (72.3%)	59 (22.1%)	15 (5.6%)	267 (100.0%)
(8) 男	127 (56.4%)	81 (36.0%)	17 (7.6%)	225 (100.0%)
女	185 (69.3%)	65 (24.3%)	17 (6.4%)	267 (100.0%)
(9) 男	153 (68.0%)	60 (26.7%)	12 (5.3%)	225 (100.0%)
女	227 (85.0%)	34 (12.7%)	6 (2.2%)	267 (100.0%)
(10) 男	59 (26.2%)	66 (29.3%)	100 (44.4%)	225 (100.0%)
女	102 (38.2%)	89 (33.3%)	76 (28.5%)	267 (100.0%)
(11) 男	41 (18.2%)	65 (28.9%)	119 (52.9%)	225 (100.0%)
女	78 (29.2%)	96 (36.0%)	93 (34.8%)	267 (100.0%)
(12) 男	41 (18.2%)	69 (30.7%)	115 (51.1%)	225 (100.0%)
女	83 (31.1%)	96 (36.0%)	88 (33.0%)	267 (100.0%)

表 3: アンケート調査 2 の結果

	男性	女性		男性	女性
(1')	<u>じゃん</u> 57.0% よね 18.0% でしょ 7.0% よな 4.1%	<u>じゃん</u> 73.2% よね 17.1% でしょ 4.9%	(7')	<u>じゃん</u> 64.5% よ 7.0% な 5.8%、× 5.8%	<u>じゃん</u> 62.0% × 13.7% よ 6.3%、し 4.9%
(2')	<u>じゃん</u> 27.9% だし 19.2% だよ 15.1% だから 12.2%	だし 34.1% <u>じゃん</u> 24.4% だもん 15.1% だよ、だから 8.3%	(8')	ね 40.1% <u>じゃん</u> 33.7% な 14.5%	ね 67.3% <u>じゃん</u> 17.1% んだね 7.3%
(3')	<u>じゃん</u> 43.6% もん 16.3% し 15.1%	<u>じゃん</u> 32.7% し 29.8% もん 26.3%	(9')	<u>じゃん</u> 69.8% やん 7.6% ね 3.5%	<u>じゃん</u> 70.7% ね 12.7% やん 4.9%
(4')	<u>じゃん</u> 39.0% よ 25.6% だろ 5.8% んじゃない 4.7%	<u>じゃん</u> 31.2% よ 31.2% んじゃない 8.3% でしょ 6.8%	(10')	んじゃない 22.1% だろ 12.8% んじゃないね 12.2% でしょ 11.0% <u>んじゃん</u> 5.8%	んじゃない 51.7% んじゃないね 11.2% <u>んじゃん</u> 10.2% でしょ 8.8%
(5')	<u>じゃん</u> 53.5% だろ 17.4% よ 5.8% でしょ 4.7%	<u>じゃん</u> 75.6% でしょ 8.3% よ 6.3%	(11')	かもね 35.5% んじゃない 17.4% かな 17.4% んじゃないね 9.3% <u>んじゃん</u> 2.9%	かもね 37.1% のかな 23.9% んじゃない 22.4% <u>んじゃん</u> 3.4%
(6')	<u>じゃん</u> 66.9% よ 5.8% だろ 5.2%	<u>じゃん</u> 55.6% んじゃない 12.2% よ 10.2%	(12')	かも 43.6% んじゃない 15.1% んじゃないね 10.5% かな 7.0% <u>んじゃん</u> 5.2%	んじゃない 37.6% かも 32.7% んじゃないね 5.4% かな 5.4% <u>んじゃん</u> 3.9%

3.2. アンケート調査のまとめ

アンケート調査 1 では漫画調査の結果から推測していたように、「認識形成の要請」の用法と「認識生成のアピール」の用法を「使う」と回答したインフォーマントが非常に多かった。さらに、漫画調査の結果から「推量」の用法をもつ「んじゃん」が、首都圏の 10 代に使われなくなっているという推測したが、今回のアンケート調査 1 でそれを確認することができた。一方、推測していたものと唯一異なる結果になったのが、「共通認識の喚起」の用法である。インフォーマントが男女ともに、とても高い割合で「使う」と回答した。アンケート 1 に使用した会話文(2)と(3)は、話し手が聞き手を諭すような会話であり、なお

かつ話し手が自分自身に言い聞かせているような発言だと捉えることができる。漫画調査の結果ではこのような場合、「だろ」や「でしょ」、「もん」や「よね」が用いられていた。首都圏の 10 代が使用する話し言葉において「共通認識の喚起」の「じゃん」が担う用法の範囲が拡大していると考えられる。

アンケート調査 2 では、アンケート調査 1 よりもさらに細かい「じゃん」の使用実態を明らかにできた。アンケート 2 の会話文(2')と(3')では、アンケート 1 の(2)、(3)と近い結果が得られると推測していた。しかし、(2')では「だし」や「だもん」、(3')では「し」や「もん」という回答があり、特に女性インフォーマントの回答結果では「じゃん」と同じくらいの割合であった。漫画調査の結果を踏まえると、「だもん」や「もん」は話し手が聞き手に向けて発言するのと同時に、自分自身にも言い聞かせているような会話で使われると推測できる。(2')と(3')の会話文が、そのような発言だという印象をインフォーマントに与えた可能性が考えられるが、それに加えてこのような場合に「だし」「し」が使用されることもわかった。この結果から、首都圏の 10 代が使用している「共通認識の喚起」の表現には、「じゃん」以外にも「だし」「し」「だもん」「もん」など、様々な表現があることが確認できた。一方、「認識形成の要請」「認識生成のアピール」の用法を想定した会話文では、アンケート調査 1 で得られたものに近い結果になったと言えるだろう。さらに、「推量」の用法を想定した会話文で「んじゃん」と回答したインフォーマントが非常に少なかった。

4. まとめと今後の課題

アンケート調査の結果から、「共通認識の喚起」「認識形成の要請」「認識生成のアピール」の三つの用法をもつ「じゃん」が、首都圏に暮らす 10 代によって高い割合で使用されていることが確認できた。それとは反対に、「推量」の用法をもつ「んじゃん」を使用する割合が非常に低いことがわかった。今後は、「共通認識の喚起」の用法をもつ「じゃん」以外の表現である「だし」「し」「だもん」「もん」が首都圏の 10 代によってどのように使用されているのかを調査すると共に、「んじゃん」以外の「推量」の用法をもつ「んじゃね」「かもよ」などの使用実態も調査していきたい。さらに、「じゃん」についての調査も継続し、首都圏の 10 代以外の年代における使用実態も明らかにしたいと考えている。

参考文献

井上史雄(1983)『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』昭和 57 年度科学研究費補助金研究成果報告書／——(1998)『日本語ウォッチング』東京：岩波書店／田野村忠温(1988)「否定疑問小考」『国語学』152: 16-30／蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法—」仁田義雄編『複文の研究下』、389-417 東京：くろしお出版／早野慎吾(1996)『首都圏の言語生態(地域語の生態シリーズ関東篇)』東京：おうふう

参考資料

河下水希(2002, 2003)『いちご 100%』東京：集英社 1-3 巻／瀬尾公治(2004)『涼風』東京：講談社 1-3 巻／高橋ヒロシ(2007, 2008)『ドロップ』東京：秋田書店 1-3 巻／寺嶋裕二(2006)『ダイヤの A』東京：講談社 1-3 巻／森田まさのり(1998, 1999)『ROOKIES』東京：集英社 1-3 巻